

## 「ドストエフスキーを読む」

— 大人の読書会をやって —

大 森 正 樹

「読書会」とは懐しい言葉である。学生時代には同好の士が集まって、とてつもなく難しい本を相手に分かって分らなくても、言いたいことを言って、互いを煙に巻いていたものであった。それが分別もついた大人がやってみるとどうなるか。その面白い試みに予期せずして挑戦するはめになるとは、全然考えてもみなかったことだ。一人の熱心なドストエフスキーの読者があって、その方がかねがねすこしでも多くの人とドストエフスキーを読んで話し合っていたと考えていた。そこで色々の人間関係の織りなす繋がりを辿った結果得た情報は、ドストエフスキーに学生の頃から親しんでいて、時には学生とも読んでいる人間がいるということであった。相談の結果やってみることに参加者を募ったら、これも色々の繋がりで11人くらい集り、そうこうするうちに3人が加わって、総勢14人（男性5人、女性9人）になった。どうせやるなら最初から大きなものをとということで、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』（新潮文庫版・全三巻）を読むことにした。集まった人間は短大を卒業したという一人を除いて、全員40代以上の年齢層である。そういうグループが古典(?)と言われる本に向かった時、どんな読み方ができるであろうか。それが問題である。

読書会の方法はいたって簡単で平凡である。各章毎に担当者を決めて、その章のあらすじや感想とそれを読んで理解した点、また理解できない点を出して他のメンバーの意見を聞く。担当者以外の者もその章を読んだ感想や疑問点を出して、他の人の意見を仰ぐといったぐあいである。担当者はその章を読むことは当然だが、人によっては参考になるものを読んでそれを紹介したり、時には図解したりする。その他、その本を読む時に予め知っておくべき背景となる色々のことは、総司会者が説明を加える。このようにしてこれまで丸二年、足掛け三年をかけて、文庫本三冊分を読み終えたのである。時間は毎回ほぼ隔

週の土曜日午後4時から6時までで、終わり近くにコーヒーのサービスがある。

こういう集まりの魅力はどこにあるのだろうか。それは何と言っても自分で選んだものだという点であろう。ある程度人生を生きてきて、子供から徐々に手が離れていくにつれ、これまでとこれからの自分の人生のあり方にだんだんと思いを潜めるようになってくると、何かこれだといえるものを掴もうと模索するようになる。これだと言えるものは勿論、人により様々であるが、一冊の本がそれである場合もある。特に毎日の生活に追われている頃、人は本をじっくり手に取る暇はない。ある程度の余暇があってこそ、本は人の手に触れられるのである。その時若い時に読み落としたものが、あの時読みきれなかったものが、頭に浮かんでくる。しかし時間はあってもそういうものを一人で読み切るのは難しい。そんな時仲間がいれば、互いに支えあって、その困難を乗り越えることができよう。それがこういう読書会の効用である。そんな意識を抱いて集まってくる人はやはり積極的である。そこから何かを得ようとする意味で必死にくらいつこうとする。勿論人間であるから、毎回そんな緊張が続くわけではないが、おしなべて意欲という点では、学生と一緒に、しかも何らかの授業という形式でやる時との大いなる相違である。誰でも日本の学生はそうであるが、どんなに面白い内容のテキストを選んでもそれが授業であり、単位と関係しているとなると途端にその魅力は半減していくのである。授業は楽しいものであるという思いがいきわたっていないせいだろうか。それともそのテキストを用いる教師の力量が、授業の時に限って、萎えていくのだろうか。与えられたものということがこれ程人を引き離すものであろうか。教師は何でもできるわけではない。できうるものを並べてそれを学生が自由に選択しても、学生の興味と差し出されたものとズレは当然ある。こうして行き違いは永久に矯正されることはないのであろうか（こういう意見もある。「学校で読まれた本にあまり愛着がないのは、なぜそれを好きにならねばならないかを説明される場所に起因しているのであろう。・・・他方、学校の務めは何らかのテキスト・・・を説明し、その後他のすべてのテキストを味読しうるようにしてやることにある。」マンリオ・ターラモ、『「フーコーの振り子」指針』p.12 谷口他訳）。

しかし一度学校を離れて、心の内に何か問題を持つやいなや、それに対する適切なアドバイスを何らかの形で求めようとする。授業とか単位とかに縛られないだけに、そして又自分の実存的な欲求であるだけ一層その要求と持たざるものを得ようとする気持ちは大きくなる。学習意欲の芽生えと言ってよかろう。人は欠乏しているものを求めるらしい。潤沢に与えられるものはそれがどれだけ栄養価に富んでいようとも、手が出てこないのである。無いものは欲しいし、去ったものは尊い。そこに大方の学生との差が出てくる。学生はどうし

でも学校にいる時に照準を当てて考えるが、学校を離れた大人の場合はその読書を生涯のスパンで考えるからである。単に与えられた材料から、先を見通したものと変化しているからである。そして何よりも学校を出てからの夫々の人生経験が裏打ちされてくる。書かれたものを書かれたものとしてただ読むのではなく、全く同じものでなくとも、自分の経験に重ねあわせながら、そこから類推して、学んでいく。従って読書会での討論もそのような内容の話題が当然出てくるから、話もはずむのである。そこでは自分の人生を語るだけでなく、他人の人生を学び知るわけである。そうした色々の人生模様と対象となる本の内容が重なって、より深い理解を得ることが出来るようになる。それ故、本そのものを学ぶというよりは、参加者の考え方、生き方を学ぶことになる。確かに参加者の発言にはその人となりか如実に現れてきている。会を重ねるに従って、互いがよりよく知り合うことにもなり、単なる読書会という枠を越えたものと育っていくことにもなる。

こういう試みが生涯学習という範疇の中でどんな位置を占めるのか定かではないが、人間どんな年齢になっても、いかなる形であれ学ぶということを止めることはないであろう。人間は聖書によれば、神の像と似姿として作られたという（『創世記』1、26）。そこで言う神の像は何を意味するかで種々の見解があるであろうが、人生を生きることを通じて人は本当の神の像、神の似姿となっていくのであって、いわば生れた当初から完全な神の像、神の似姿であるのではない。個々の人間には夫々与えられた人生での仕事がある。その点から考えるなら、そうした仕事を果たしていくための糧として、学習は位置づけられるであろう。学習内容がその仕事とうまく一致したならそれに勝ることはない。そのため学校を離れてからの学習は自分の欲求に忠実であるべきであろう。いらざる教養ではなく、魂の欲求にそったものであるべきである。自分は人生をいかに生きるべきかに常日頃から思いを潜めているなら、求める学習は単なる学びや余技ではなく、己が生の完成に向かうための学びと考えるのだが、いかがであろうか。

